

学会誌の「要旨」の考察—日本と台湾における

日本語学／日本語教育の論文の場合—

王 敏東・趙 珮君・仙波 光明

Paper Abstracts Published by Associations for Japanese
—Associations in Japan and in Taiwan for Japanese Language,
and Education—

Ming-tung Wang ; Pei-Chun Chao ; Mitsuaki SENBA

Abstract

Abstract is used to express the most important content of the paper (日本国語大辞典 (2001 (2nd edition))) . Paper abstract, as the “must” of all published papers, should clearly and concisely present the important issues addressed in the paper.

This work studied the 131 paper abstracts published during 2006-2008 in two Japanese Associations of Japan and two Japanese Associations of Taiwan that summarized the compositions, paragraphs, and titles used by Japanese language and Japanese education disciplines. All abstracts are common in using either one paragraph or two paragraphs with no conjunction. Most commonly the abstract focused on subject, objective, conclusion, and proposition. Each abstract in a paper from Japan was comprised of one paragraph with five sentences, while that from Taiwan was composed of two paragraphs with six sentences. The sequence of description and numbers of purposes, methods, and conclusions differ among the two disciplines.

This paper explored how the paper abstracts published by Japanese Associations of Japan and of Taiwan were composed, which should benefit the following compositions in different fields.

要旨

要旨は「言い表わそうとするもっとも大切な点」（『日本国語大辞典』（2001（2版）））であり、学術論文において正確かつ簡潔に論文の梗概・重要な内容を記述する短い文章のことで、現在学会誌などへ投稿する際たいてい要求されるものの1つである。

本稿は、日本の日本語学会、日本語教育学会と、台湾における日本に関する学会（2009年8月の時点において台湾全域規模である台湾日本語文学会、台湾日本語教育学会）の機関誌に近年（2006～2008）発表されている日本語学と日本語教育関係の論文（131本）の日本語要旨を研究対象とした。

具体的には日本語学、日本語教育という2分野に分け、要旨の構成、段落、冒頭の内容などの面について検討した。2地域および2分野のいずれにも共通している特徴として“「一段落で構成されている」要旨、「複数の段落で構成されているが、段落と段落のつなぎに接続表現が使用されていない」要旨が多く、段落と段落の間で多用されている接続表現が順接である”、“冒頭の内容として最も多用されているものは「主題・主旨・結論・提案などを述べる」ものであった”があげられる。日本と台湾の間で地域差としては“日本の論文要旨は平均1段落、5文、台湾の論文要旨は平均2段落、6文から構成されている”ことがある。また、“「目的」「研究方法」「結論」などにおける要旨に含まれる各項目の数値”、“各分野の論文の要旨における項目の並べ方”は地域および分野によりかなり異なっている。

このような研究結果は、日台両地域における学会誌に掲載された論文要旨の実態を明らかにするばかりでなく、論文執筆の指導にも大いに役立つと考えられる。

1、はじめに

通常論文の一番初めに置かれている要旨は論文の“顔”とってよかろう。要旨の内容により、論文全体を読むかどうかを決める読者が多いという¹。論文の要旨には普通、研究の目的、研究の方法（観点、立場などの場合もある）、結論、評価が含まれていなければならない²ため、論文全体のあらすじを効率よ

¹ 李（2009：17）。また、周（1989：123）も同様のことを述べている。

² 浜田他（2002：169）、金（2008：46）など。また、戸田山（2006：78～79）は「アブストラクトに書くべきこと」に目的、結論、論文の本体でどのように論が展開されるか

く伝達することが要旨の基本的で重要な機能となる。

ただし、佐久間（2000（三刷）；1989一刷）：7）に「日本語関係の学術論文とその英文要旨を読み比べたある外国人研究者が、それらの概要の中に研究成果以外の、先行研究や研究動機などを記した、英文の“Abstract”とは異なるものが多いのに驚いたという。概要の書き方によって論文発表の機会が左右されるという米国では、大学院の授業で専門分野の論文の概要作成の練習をすることもあると聞く。日本では、こうした指導はほとんどなされていないだろう。研究者各人が言わば自己流で概要を書いているわけだが、専門分野によっては、その研究姿勢まで疑われかねないこともあるだろう。」³という指摘があった。この指摘を通して、改めて論文要旨の重要性が確認できるばかりでなく、国や専門分野によって要旨の書き方が異なっていることも伝わってくる。

以上のことより、本稿は日本の日本語学会と日本語教育学会、そして台湾の台湾日本語学会と台湾日本語教育学会の機関誌に載せられている論文の日本語要旨を検討することにした。まず、各要旨の構成、段落、文、冒頭の内容などに関する実態を究明した。また、分野（日本語学、日本語教育（以下「教育」））による日本と台湾における特徴および異同を探究した。

2、文章論の概要——本研究が検討する項目

日本における文章論の研究は、時枝⁴により提唱されて以来、阪倉（1951～1952；1998（三版））による「しかし」「ところが」「が」などが極めて重要な役割を果たしていることの提示、永野（1959）の接続詞⁵などによる段落と段落とのつながりに関する論考、市川（1997（新訂33版）；1978新訂初版）による接続関係の種類や、冒頭による分類などの考案などがみられる⁶。また、前

が必ず入れなければならない項目とし、「文学作品、芸術作品などについて論じた場合は、扱った素材が何であるか」「何かを調査した場合は調査方法と調査対象」も論文の性格や分野により入れることもあるとしている。

³ ちなみに、英語“Abstract”は台湾または日本の「要旨」に関する概念とは異なっていると考えられる。詳しいことは別の機会に譲りたい。

⁴ 時枝誠記（1900～1967）。

⁵ 「接続詞が、文章展開の重要な標識である」という概念だけは時枝（1950）にすでに提示されているが、詳しく探求されていなかった。

⁶ 林（1987：277）にも「文章の研究は、国語学の世界では、時枝誠記氏の提唱以来、文法学の、語論、文論の上位領域に位置すべきものとして、「文章論」の名のもとに考えら

田 (1991: 117) は「文章の表す内容は特に文学作品の研究において問題とされることが多かった」「国語学的な文章の構造の研究は、文章の構造の一般的・普遍的な体系を明らかにすることを目的としている」と述べている⁷。なお、永野 (1959: 37) は、文章論のための文章研究にのみとどまることは不足で、実用のための文法論、実践に役だてるための文章論を考えていきたいとも述べている。

本稿は学会誌に掲載された論文の日本語要旨を検討する対象とした。学会誌で発表された論文 (の要旨) は通常厳密な審査をパスしたものであり、この種の文章の一種の到達点 (モデル) と考えられるため、研究成果をたとえば大学院の論文指導や、研究上の参考資料として提供したい。

3、日本の日本語学会と日本語教育学会

日本における日本語と日本語教育に関する全国規模の学会は、日本語学会と日本語教育学会がともに歴史が長く、会員数も多い⁸。2つの学会について、学

れるようになった。文章論は、そのように位置づいたものの、文章論の研究内容は、まだ、しっかりした方向性をもつとは言いがたい。その中でも、大体方向が見えるのは、永野賢氏や市川孝氏によって拓かれた、文の接続論と文章構造論の各領域である。」と述べられている。

⁷ 原文の文脈は「文章は思想上・内容上において一まとまりのものとして完結している。その文章の表している内容の面から言えば、その文章の部分部分がそれぞれに意味内容を表しつつ、全体として一つの意味内容を表すものとして総合して考えることが出来るはずである。ここに内容的な面を中心にした文章の構造の研究が成立する。文章の表す内容は特に文学作品の研究において問題とされることが多かった。文学作品の研究においては、作者がどのように文章をまとめつつ自分の表そうとしている内容を表現しようとしているかを考えたり、すでにまとめられている文章を段落に分け段落ごとの内容を把握することによって全体の内容を理解しようとしたりする、文章の構造を考えることに連なる研究が行われてきたのである。しかし、文学作品の文章は、論理的に構成された文章とは異なっているのであり、文・段落などの積み重ねによる構造を考えることによってテーマ・内容を捕えられるものばかりであるとは限らない。国語学的な文章の構造の研究は、文章の構造の一般的・普遍的な体系を明らかにすることを目的としており、文学作品を評価するための手段としての文章の構造の研究とは目的を異にしているのである。」となっている。

⁸ 両学会とも研究する対象および時代や研究方法などが限定されていない。調査対象と

会各々の公式ホームページに掲載されている情報に基づき、筆者が改めて整理したものを示す。

3-1、日本語学会

戦前の1944年に「国語学会」として設立、2004年に「日本語学会」に改称されているこの学会は、日本語研究の進展を願うものであるという。上記の名称変更より1年遅れて、機関誌のタイトルも2005年以降、以前の『国語学』から『日本語の研究』へと変わった。2009年4月に『日本語の研究』第5巻2号（『国語学』通巻237号）が刊行されている。論文の投稿には300～400字の要旨が求められている。

3-2、日本語教育学会

日本語教育学会は1962年に「外国人のための日本語教育学会」という名称で発足し、日本語学会には及ばないものの、50年近い歴史を持つ。学会の目的は日本語を第一言語としない者に対する日本語教育の研究促進と振興を図り、もって日本の学術の発展並びに日本と諸外国との相互理解および学術文化の交流に寄与することであるという。機関誌『日本語教育』は2009年1月に140号が刊行されている。投稿に際し、400字以内の要旨が要求されている。

4、台湾の台湾日本語文学会と台湾日本語教育学会

台湾における日本語と日本語教育に関する全国規模の学会は2009年8月現在台湾日本語文学会、台湾日本語教育学会があり、それぞれ機関誌が刊行されている。以下、2つの学会について、学会各々の公式ホームページに掲載されている情報に基づき、筆者が改めて整理する。

4-1、台湾日本語文学会

台湾日本語文学会は1989年3月に台湾日本語文研究会⁹として設立され、2009年8月現在20周年を迎える、台湾で最も歴史が長い日本語・日本文化に関する学会である。学会機関誌『台湾日本語文学報』を毎年発行しており、2009

なる学会の掌握には国文学研究資料館 <http://www.nijl.ac.jp/events/gakkai-top.html> を用いた(2009.6)。

⁹ 1992年10月に中華民国日本語文学会の名称で学会として認可され、2001年に台湾日本語文学会と名称変更される。

年6月までに25号発行している¹⁰。「日本文学、語学、社会文化および日本語教育の分野」の投稿を募集している。投稿の際、日本語の要旨は500字以内と規定されている。

4-2、台湾日本語教育学会

台湾日本語教育学会は1993年に設立され、機関誌の『台湾日本語教育論文集』は2009年8月現在12号まで刊行されている¹¹。学会名は「日本語教育」となっているが、機関誌では日本語教育に限らず、日本語学、日本文学、日本文化などの分野の論文も歓迎されているようだ。日本語の要旨に関する字数の規定は30字×30行の1ページ以内¹²となっている。

5、2006～2008年に4学会の機関誌に掲載された論文の日本語要旨

本稿は2006～2008年に上記（「3、日本の日本語学会と日本語教育学会」と「4、台湾の台湾日本語学会と台湾日本語教育学会」）機関誌に掲載された論文の日本語要旨を研究対象とした。全体的に、日本の2誌で要求されている要旨の字数は台湾の2誌より少ないことが分かった。言い換えれば、日本の2誌に論文を掲載されるためには、より厳しく制限された条件のもとでより簡潔で効率よく表現された要旨が必要なのである。

一方、2006～2008年に4誌に掲載された投稿論文の詳細は次（表A）の通りである¹³。

表Aで示されているように、『日本語の研究』は専ら日本語関係の論文しか掲載しないのに対して、『日本語教育』は日本語教育関係の論文はもちろんのこと、その基礎となる語学関係の論文も収録するようである。台湾でも、『台湾日本語文学報』は日本語関係の論文が多く、『台湾日本語教育論文集』は日本語教育関係の論文も語学関係の論文も収録するという、日本の2誌の違いに類似した傾向は見られるが、さほど顕著ではない。また、全体的な論文数について見ると、日本の2誌は台湾の2誌の倍ぐらいとなっている。

¹⁰ 2007年までには年1回、2008年より年2回刊行されている。

¹¹ 1994年2月に創刊号、1994年12月に第2号が刊行された後は、1999年12月（第3号）より毎年1回（12月に）刊行されている。

¹² タイトル、作者の所属、作者名、キーワードを含む。

¹³ 寄稿論文や報告を含まない。また、台湾の2誌には文学や文化の論文も載せられているが、これらは本稿の検討対象外とする。

表A 4誌に掲載された論文の数

	日本		台湾		
	日本語の研究	日本語教育	台湾日本語文 学報	台湾日本語教 育論文集	
語学	56	12	18	6	92
教育	0	23	7	9	39
計	56	35	25	15	131
	91		40		
	131				

*数字は論文数。

以下、日本と台湾における語学、教育の論文を「分野ごと/全体」「地域ごと/全体」について検討する。

検討する項目は量と質の観点から大きく2つに分けられる。量に関するものは数字化できる「要旨を構成する段落、文」(の数)、「目的」「研究方法」「結論」などの項目(の数)など、質に関するものは要旨の構成、段落と段落のつながりに用いられた接続表現、含まれる項目(目的、研究方法、結論など)の提示の順番や、冒頭の内容などである。

5-1、要旨を構成する段落および文

前掲した前田(1991:117)は、国語学的な文章の構造の研究は、文章の構造の一般的・普遍的な体系を明らかにすることを目的としていると述べている。本稿では学会誌で発表された論文の要旨の構造の一般的・普遍的な体系を明らかにしたい。

したがって、今回調査した範囲内の論文要旨を、段落、文という2つの部分に分けて検討する。

5-1-1、段落の数

段落は「長い文章の中の、一つの主題をもってまとまった部分」のことである¹⁴。一つのまとまりをなしている「文章」(本稿では「要旨」)の性質は、

¹⁴ 『大辞林』

<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?enc=UTF-8&p=%E3%81%A0%E3%82%93%E3%82%89%E3%81%8>

その成分となっている幾つかの部分（段落）相互の関係や、その配置によって生じる表現の展開である¹⁵。文章の構成要素としての段落作りは、話題の変化に基づく意味内容のまとまりを文章全体の主題と関係付けて、どの程度精密に表すかを工夫しなければならない¹⁶から、文もしくは文集合（文段）の間に見られる意味上の関連形式を中心として考察する必要があるといわれている¹⁷。

論理的な文章における段落とは、「ある一つの内容を表すための、文章の論理的な単位」と定義されたことがあるように、段落ごとに内容のまとまりがあるように書かなければならない。各段落が論理的につながっていなければならない、という¹⁸。

佐久間（1998：50～52）は日本語の文章の（段落の）改行規則を、「新しい話題が始まる時、改行する」「新しい立場や観点が変わるとき、改行する」、「「開始部（始め）・継続部（中）・終了部（終わり）」という文章構成の三区区分が変わるとき、改行する」、「新しい会話や引用が始まる時」、「一度に読んで理解するのが難しいような複雑な話題は、適当に改行する」、「表現の単調さを避けたり、内容を強調したりするときは、適当に改行する」と分類した。

今回調査した範囲内の論文要旨を構成する段落の数は表B（次ページ）のようになっている。

全体的に日本での要旨に含まれる段落数は、語学・教育いずれの分野でも2段落に及ばず、分野間での差は見られない。一方、台湾ではほぼ2段落から構成されている。

F&dtype=0&stype=1&ndname=0ss

また、永野（1959：61～62）にも「文章は、内容上のいくつかのまとまりごとに、行を改めて書かれるのが普通である。そういう一つ一つのまとまりを段落または文段と言う。」とある。

¹⁵ 永野（1959：29）。

¹⁶ 佐久間（1998：50）。

¹⁷ 市川孝（永野（1959：29）掲載の引用）。

¹⁸ 二通・佐藤（2001：38）。

表B 要旨を構成する段落の数

	日本			台湾		
	語学 ¹⁹	教育 ²⁰	91本の総数 /平均	語学 ²¹	教育 ²²	40本の総数 /平均
段落数	95/1.40	33/1.43	128/1.41	46/1.92	34/2.13	80/2.00

*数字は「総数/平均」。

5-1-2、要旨を構成する段落間の接続

段落と段落はどうやってつながるかという、そこには接続詞が大きく機能している²³。永野（1959：29～31）は阪倉（1951～1952）の説をさらにまとめ、「しかし」「ところが」「が」などが極めて重要な役割を果たしている²⁴ため、「しかし型の文章」「すると型の文章」「電信符号のような調子の文章」という見方で、文章構造を類型化し、文章論研究の一つの角度を示した。寺村他（2002：19）は市川（1978）を参考にして接続関係の類型と主な接続表現によって「1. 順接型 前の内容から当然予想される結果を後に述べる。」「2. 逆接型 前の内容から予想されることに反する内容を後に述べる。」「3. 添加型 前の内容の同類や列挙を後に述べる。」「4. 対比型 前の内容の対照や比較を後に述べる。」「5. 同列型 前の内容の反復や言い換えた説明を後に述べる。」「6. 転換型 前の内容から転じた別個の内容を後に述べる。」「7. 補足型 前の内容を後で補充する。」「8. 連鎖型 前の内容を直接説明する内容を後に述べる。」という8分類をしている。

本稿はこの8分類にしたがい、今回取り上げた4誌の論文要旨を調査した。統計的な数字をまとめると、表C（次ページ）のようになる。

表Cでまず「一段落で構成されている」要旨が最も多いことが分かる。これは要旨がもともと短くまとめることを要求されているからである。次に、「複数の段落で構成されているが、段落と段落のつながりに接続表現が使用されてい

¹⁹ 68本の総数/平均。

²⁰ 23本の総数/平均。

²¹ 24本の総数/平均。

²² 16本の総数/平均。

²³ たとえば永野（1959：25～31）。また、二通・佐藤（2001：42）も同様の観点を持っている。

²⁴ 阪倉（1998（三版）：43）。

ない」要旨も多いことが観察できた。

表C 段落と段落の間で用いられた接続表現

		日本			台湾		
		語学 ²⁵	教育 ²⁶	91 本中に占める本数/%	語学 ²⁷	教育 ²⁸	40 本中に占める本数/%
接続関係の類型 (と主な接続表現)	順接	3/4.41	4/17.39	7/7.69	4/16.67	4/25.00	8/20.00
	逆接	2/2.94	0/0	2/2.20	0/0	0/0	0/0
	添加	3/4.41	1/4.35	4/4.40	3/12.50	0/0	3/7.50
	対比	1/1.47	0/0	1/1.10	1/4.17	1/6.25	2/5.00
	同列	1/1.47	0/0	1/1.10	0/0	1/6.25	1/2.50
その他	一段落	47/69.12	17/73.91	64/70.33	9/37.50	6/37.50	15/37.50
	接続詞なし	11/16.18	1/4.35	12/13.19	7/29.17	4/25.00	11/27.50

*数字は「使用回数(延べ)/%」。

また、種類について見ていくと、語学の論文要旨における段落と段落の間で多く用いられている接続表現は日本と台湾のいずれにおいても順接と添加である。また、教育の場合も日本と台湾のいずれも1位は順接である。最後に逆接は日本の語学の論文要旨に用いられているが、日本の教育、そして台湾の語学および教育には一切使われていない。

全体的には、「一段落で構成されている」要旨、「複数の段落で構成されているが、段落と段落のつながりに接続表現が使用されていない」要旨が多く、段落と段落の間で最も多用されている接続表現が順接である、という2地域および2分野における共通性を見出した。

²⁵ 68 本中に占める本数/%。

²⁶ 23 本中に占める本数/%。

²⁷ 24 本中に占める本数/%。

²⁸ 16 本中に占める本数/%。

5-1-3、文の数

文は阪倉（1998（三版）：49）に「それだけである閉じめのある思想を話し手の立場から表現しているものでなくてはならない」と定義されている。

今回調査した範囲内の論文要旨を構成する文の数は表Dのようになっている。

表D 要旨を構成する文の数

	日本			台湾		
	語学 ²⁹	教育 ³⁰	91本の総数 /平均	語学 ³¹	教育 ³²	40本の総数 /平均
文数	365/5.37	126/5.48	491/5.40	148/6.17	106/6.63	254/6.35

*数字は「総数/平均」。

全体的に日本の2分野とも5文ぐらいで要旨を構成している。台湾の方は日本のより長い6～7文で要旨が構成されている。その差は日本で要求される要旨の字数が台湾のより少ないことに起因していると思われる。

5-2、要旨に含まれる項目（目的、研究方法、結論など）

論文の要旨は普通、研究の目的、研究の方法（観点、立場などの場合もある）、結論、評価を含むといわれている。しかし、実際に日本や台湾の学会誌で発表された論文の要旨はこの条件をどのぐらい満たしているだろうか。

一方、要旨における研究の目的、研究の方法（観点、立場などの場合もある）、結論などについて、市川（1997：50～61）の材料の配列の観点から分析するとどうなるだろうか。

以下、今回調査した論文要旨の実態を踏まえた上で、地域別および分野別などの観点から検討する。

5-2-1、論文要旨に含まれる項目と分野との関係

各要旨に、目的、研究方法、結論などの項目が含まれているかどうかを示す

²⁹ 68本の総数/平均。

³⁰ 23本の総数/平均。

³¹ 68本の総数/平均。

³² 16本の総数/平均。

と表Eのようになる。

表E 各項目が論文要旨に含まれる様子

	日本		台湾	
	語学 ³³	教育 ³⁴	語学 ³⁵	教育 ³⁶
目的	46/67.65	15/65.21	11/45.83	9/56.25
研究方法	29/42.65	20/86.96	17/70.83	14/87.50
結論	65/95.59	22/95.65	21/87.50	10/62.50
その他 ³⁷	38/55.88	8/34.78	16/66.67	11/68.75

*数字は「総数/%」。

表Eは、「目的」「研究方法」「結論」等の項目の様相を、語学、教育という分野別、または日本と台湾という地域別に示す。

まず、研究の目的が明示されているものは、日本と台湾、語学と教育のいずれも5割前後にとどまっており、必ずしも高い数値とは言えない。

また、「研究方法」は日本の語学の雑誌で発表された論文要旨の4割程度で触れられている。それに対して、日本の教育の論文要旨では86.96%という高い数値できちんと言及されている。一方、台湾の方でも、語学の論文要旨より教育の論文要旨の方に「研究方法」を明示するものが多い。

次に、要旨に「結論」が含まれる割合は、日本の2分野の論文要旨でいずれ

³³ 68本中に占める本数/%。

³⁴ 23本中に占める本数/%。

³⁵ 24本中に占める本数/%。

³⁶ 16本中に占める本数/%。

³⁷ 表Eにおける「その他」の詳細は下表(表a)の通りである。

表a 「その他」に含まれる項目

	日本		台湾	
	語学	教育	語学	教育
貢献	1/1.47	4/17.39	5/20.83	2/12.50
背景	36/52.94	7/30.43	11/45.83	11/68.75
今後の課題	2/2.94	0/0	4/16.67	4/25.00

*数字は「総数/%」。

も9割を超える高い数値に達している。それに対して、台湾の方は語学で8割以上、教育で7割未満となっている。

なお、「その他」の「(研究の)背景」については日本の語学、台湾の教育の論文要旨に多く含まれている。しかし、「今後の課題」は、日本の教育の論文の要旨では一切論じられていない。

両地域、そして各分野の要旨に含まれる項目を、含まれる度合いの高いものから順に示すと、日本の語学では「結論」「目的」「背景」、の順になっている。台湾の語学では「結論」が最も多く含まれており、次は「研究方法」、そして「目的」と「背景」が同じ程度となる。以上の結果より、この分野の論文の要旨に関して各地域で重要視されている項目が分かる。また、教育の論文(の要旨)についてみると、日本の方では「結論」「研究方法」「目的」、台湾の方では「研究方法」「背景」「結論」という順で多く含まれており、各地域が日本語教育の論文の要旨に関して重んじる項目の違いが見えてきた。

5-2-2、論文要旨に含まれる各項目の順序

同じ情報でも、提示する順序の違いで、その効果に大きな差が生じるといわれている³⁸。

前節(5-2-1、論文要旨に含まれる項目と分野との関係)で検討された、「目的」「研究方法」「結論」などの項目が要旨における提示順序を整理すると表Fようになる。

表F 各項目の提示順序

		日本			台湾		
		語学 ³⁹	教育 ⁴⁰	91本中に占める本数/%	語学 ⁴¹	教育 ⁴²	40本中に占める本数/%
目的	研究方法→	12/17.65	9/39.13	21/23.08	5/20.83	2/12.50	7/17.50
	結論	②	①	①	①	②	①

³⁸ たとえば中村(1998:38)。

³⁹ 68本中に占める本数/%。

⁴⁰ 23本中に占める本数/%。

⁴¹ 24本中に占める本数/%。

⁴² 16本中に占める本数/%。

→	研究方法	1/1.47	0/0	1/1.10	2/8.33⑤	0/0	2/5.00
	結論	19/27.94 ①	1/4.35	20/21.98 ②	3/12.50 ④	0/0	3/7.50⑤
	背景→結論	2/2.94	0/0	2/2.20	0/0	0/0	0/0
研究 方法 →	結論	2/2.94	5/21.74 ②	7/7.70④	4/16.67 ③	2/12.50 ②	6/15.00 ③
	目的→結論	1/1.47	2/8.70③	3/3.30	0/0	0/0	0/0
背景 →	目的→研究 方法→結論	5/7.35	2/8.70③	7/7.70④	1/4.17	2/12.50 ②	3/7.50⑤
	目的→研究 方法	0/0	0/0	0/0	0/0	2/12.50 ②	2/5.00
	目的→結論	6/8.82④	1/4.35	7/7.70④	0/0	2/12.50 ②	2/5.00
	研究方法	2/2.94	1/4.35	3/3.30	1/4.17	3/18.75 ①	4/10.00 ④
	研究方法→ 結論	6/8.82④	1/4.35	7/7.70④	5/20.83 ①	2/12.50 ②	7/17.50 ①
	結論	12/17.65 ②	1/4.35	13/14.29 ③	2/8.33	0/0	2/5.00
	研究方法→ 目的→結論	0/0	0/0	0/0	0/0	1/6.25	1/2.50

*数字は「出現回数（延べ）/平均」で、○内の数字は順位を表す。

語学の論文要旨においては、日本では「目的→結論」となっているものが最も多く見られるが、台湾では「目的→研究方法→結論」「背景→研究方法→結論」（いずれも5本の並列1位）となっているものがともに多く見られる。2位以下は日本の「目的→研究方法→結論」「背景→結論」（いずれも12本の並列2位）、「背景→目的→結論」「背景→結論」（いずれも6本の並列4位）と、台湾の「研究方法→結論」（4本3位）、「目的→結論」（3本4位）となっており、地域によって傾向が異なる。一方、日本の教育の論文要旨は「目的」から導入したものが多く、そのような例として「目的→研究方法→結論」

という順序のものが1位（9本）を占めている。それに対し、台湾の教育の論文要旨では「背景→研究方法」という展開となっているものが最も多い。

また、表Fをさらに簡略化すると、表Gとなる。

表G 要旨における展開

	日本			台湾		
	語学 ⁴³	教育 ⁴⁴	91本中に 占める本 数/%	語学 ⁴⁵	教育 ⁴⁶	40本中に 占める本 数/%
目的→	34/50.00	10/43.48	43/47.25	10/41.67	2/12.50	12/30.00
研究方法→	3/4.41	7/30.43	10/10.99	4/16.67	2/12.50	6/15.00
背景→	31/45.59	6/26.09	37/40.66	9/37.50	12/75.00	21/52.50

*数字は「出現回数（延べ）/%」。

表Gで、日本と台湾とともに語学の論文要旨で「目的」から述べるという展開となるものが一番多かった。次に多い「背景」からのものも少なくなかった。それに対して、教育の論文要旨では日本は「目的」から、台湾は「背景」から述べるのが各々多く、日台両地域の違いが見られる。

これで、論文要旨が地域および分野によりかなり異なっていることが分かる。

5-3、冒頭

永野（1959：59）が「文章は文の累積したものである。しかし、単なる集合体ではない。表現に即していえば、表現者は、まず最初の文を表現する。それを受けて、次の文を表現し、さらにそれに続けて次の文を表現する。というように、時間的・線条的な累加・連続として成立する流れである。」と、市川（1997（新訂33版；1978新訂初版）：64～65）が「どんな文章を書く際にも、初めをどのように書き起こすかということには、なみなみならぬ苦心がある」「（文章の）展開の根源は、冒頭の一節にあると言える。ここに、文章の重要性が見られる」、西田（1992：142～143）が「文章の書き出しは、文章を展開してい

⁴³ 68本に占める本数/%。

⁴⁴ 23本に占める本数/%。

⁴⁵ 24本に占める本数/%。

⁴⁶ 16本に占める本数/%。

く原動力としての力を持つものであるとともに、読み手をひきつけ、先を読みたいという意欲を起こさせるものでなければならない」「情報伝達や報告書、実務文書などでは、要点を最初に的確に伝えるという意味で、文章の書き出しが重視される」と指摘したように、文章の冒頭は大事である。市川（1997（新訂33版）；1978新訂初版）：64～75）はさらに文章の冒頭の型を次のように分類している。

〔叙述内容の集約としての冒頭〕

- (a) 主題・主旨・結論・提案などを述べる
- (b) 話題もしくは課題について述べる
- (c) あら筋・筋書きを述べる

〔主内容に対する前置き・導入としての冒頭〕

- (a) 筆者の口上、執筆態度を述べる
- (b) 叙述内容に枠をはめる
- (c) 時・所・登場人物などを紹介する
- (d) 主内容の糸口となる枕を置く
- (e) 主内容とは対比的な内容を述べる

〔主内容を構成する一部としての冒頭〕

この市川（1997（新訂33版）；1978新訂初版）：64～75）の分類により、本稿が検討する論文の要旨の実態を統計した。結果は表Hの通りである。

表H 冒頭の内容

		日本			台湾		
		語学 ⁴⁷	教育 ⁴⁸	91本中に占める本数/%	語学 ⁴⁹	教育 ⁵⁰	40本中に占める本数/%
叙述内容	(a)	40/58.8 2	15/65.2 2	55/60.4 4	11/45.8 3	7/43.75	18/45.0 0

⁴⁷ 68本中に占める本数/%。

⁴⁸ 23本中に占める本数/%。

⁴⁹ 24本中に占める本数/%。

⁵⁰ 16本中に占める本数/%。

の集約としての冒頭	(b)	4/5.88	2/8.70	6/6.59	1/4.17	2/12.50	3/7.50
	(c)	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
主内容に対する前置き・導入としての冒頭	(a)	5/7.35	2/8.70	7/7.69	1/4.17	2/12.50	3/7.50
	(b)	6/8.82	1/4.35	7/7.69	4/16.67	2/12.50	6/15.00
	(c)	3/4.41	0/0	3/3.30	0/0	1/6.25	1/2.50
	(d)	5/7.35	1/4.35	6/6.59	1/4.17	2/12.50	3/7.50
	(e)	1/1.47	0/0	1/1.10	6/25.00	0/0	6/15.00
主内容を構成する一部としての冒頭		4/5.88	2/8.70	6/6.59	0/0	0/0	0/0

*数字は「出現回数(延べ)/%」。

まず「叙述内容の集約としての冒頭の(c)あら筋・筋書きを述べる」は今回の調査で見当たらなかった。また、「時・所・登場人物などを紹介する」は日本の教育と台湾の語学の論文要旨に、「主内容とは対比的な内容を述べる」は日本と台湾両地域の教育の論文要旨に見られなかった。一方、最も多用されている冒頭は、地域や分野を問わず、「主題・主旨・結論・提案などを述べる」となっている。

6、本研究の文章論および日本語教育上の意味

以上、本文における「1、はじめ」で言及した佐久間(2000(3刷;1989一刷):7)の指摘や、「2、文章論の概要」で提示した前田(1991:117)の呼び掛けなどを踏まえて、検討してきた。その結果、日本と台湾、または語学分野と教育分野の論文要旨の実態が明らかになった。この調査結果は日本および台湾の論文要旨にそれぞれ独自性があることを明らかにし、論文要旨の文章論の中での位置付けをも可能にした。

大学院生の教育において、たとえば台湾では修士・博士といった学位をとるのに、論文の提出は必要条件とされており、それがゆえに、多くの大学院で「研

究方法（論）」のような授業が開講されている⁵¹。論文提出の際、本稿で検討した学会等での論文の公開発表はもちろんのこと、学位論文にも要旨が求められている。したがって、厳しい審査を受けた、既刊の論文（の要旨）を、モデルとしてそのような教育に使用すれば、実用的な効果が期待できる。とくに、本稿の、日本、台湾、そして語学、教育の論文の要旨の実態を分析した結果は、どの分野の論文をどこで発表するかを考える際、重要な参考となり得る。

7. おわりに

本稿は 2006～2008 年に日本の日本語学会、日本語教育学会と、台湾における日本に関する学会（2009 年 8 月の時点において台湾全域規模である台湾日本語学会、台湾日本語教育学会）の機関誌に掲載された論文 131 本の日本語要旨を検討した。“日本の論文要旨は平均 1 段落、5 文、台湾の論文要旨は平均 2 段落、6 文から構成されている”、“地域および分野の区別なく、論文要旨はいずれも「一段落で構成されている」要旨、「複数の段落で構成されているが、段落と段落のつながりに接続表現が使用されていない」要旨が多く、段落と段落の間で多用されている接続表現が順接である”、“語学、教育という分野、または地域により、「目的」「研究方法」「結論」等が要旨に含まれる割合は異なる”、“各分野の論文の要旨における項目の並べ方は地域および分野によりかなり異なっている”、“冒頭の内容として最も多用されているものは地域や分野を問わず「主題・主旨・結論・提案などを述べる」ものであった”、という各地域および各分野の特徴および異同を見出した。

本研究における上記のこのような結果は、日本と台湾という 2 地域および語学と教育という 2 分野の論文要旨の実態を究明しただけでなく、論文執筆上の指導（とくに台湾での論文執筆上の指導）に大いに役立つと考えられる。

参考文献

・市川孝（1997（新訂 33 版；1978 新訂初版））『新訂文章表現法』明治書院

⁵¹ たとえば義守大学応用日本語学科で「研究方法」、政治大学日本語学科で「研究方法與指導」、台中技術学院応用日本語学科（日本市場暨商務策略研究所）で「研究方法」、高雄第一科技大学応用日本語学科で「日本學研究方法」、淡江大学日本語学科修士課程で「文學研究方法導論」「語學研究方法導論」「文化研究方法導論」、呉東大学日本語学科で「研究方法論」、南台科技大学応用日本語学科で「研究方法論」、銘傳大学応用日本語学科で「研究方法論」が開講されている（2009.7 前記各大学院のホームページによる）。

- ・金坤琳 (2008) 『如何撰写和发表 SCI 期刊論文』科学出版社
- ・阪倉篤義 (1998 (三版)) 『改稿日本文法の話』教育出版
- ・佐久間まゆみ (1998) 「文章の構成と段落作りの工夫」『文章表現の工夫』文化庁
- ・佐久間まゆみ (2000 (3刷); 1989 (1刷)) 『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版
- ・周仲光 (1989) 『论文文章写作浅谈』商务印书馆
- ・台湾日本語教育学会台湾日本語教育学会
<http://www.taiwanjapanese.url.tw/>
- ・台湾日本語文学会 http://www.geocities.jp/taiwan_nichigo/
- ・寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一 (2002 (初版十刷); 1990 (初版一刷)) 『ケーススタディ日本語の文章・談話』おうふう
- ・時枝誠記 (1978 (改版第1刷); 1950 第1刷) 『日本文法 口語篇』岩波書店
- ・戸田山和久 (2006 (第20刷); 2002 第1刷) 『論文の教室』NHKBOOKS
- ・中村明 (1998) 「現代の文章におけるレトリック」『文章表現の工夫』文化庁
- ・永野賢 (1959) 『学校文法文章論—読解・作文指導の基本的な方法—』朝倉書店
- ・西田直敏 (1992) 『文章・文体・表現の研究』和泉書院
- ・二通信子・佐藤不二子 (2001 (初版3刷)) 『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
- ・日本国語大辞典編集委員会『日本国語大辞典』(2001 (2版)) 小学館
- ・日本語学会 <http://www.jpiling.gr.jp/>
- ・日本語教育学会 <http://wwwsoc.nii.ac.jp/nkg/>
- ・浜田麻里他 (2002 (第8刷); 1997 第1刷) 『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版
- ・林四郎 (1987) 『漢字・語彙・文章の研究へ』明治書院
- ・前田富祺 (1991) 「書簡文の文章構造—近代の書簡文を例として—」『国語論究第3集 文章研究の新視点』(佐藤喜代治編) 明治書院
- ・松村明 (2006) 『大辞泉』(増補・新装版(デジタル大辞泉))
<http://dic.yahoo.co.jp/guide/jj/>小学館
- ・松村明 (2006) 『大辞林』(第二版)
<http://dic.yahoo.co.jp/guide/jj02/>三省堂

- ・宮地裕・甲斐睦朗・野村雅昭・荻野綱男（2001（再版））『ハンドブック 論文・レポートの書き方』明治書院
- ・李篤中（2009）『論文與研究六講：工程編』台北：台湾大学化学工程学系